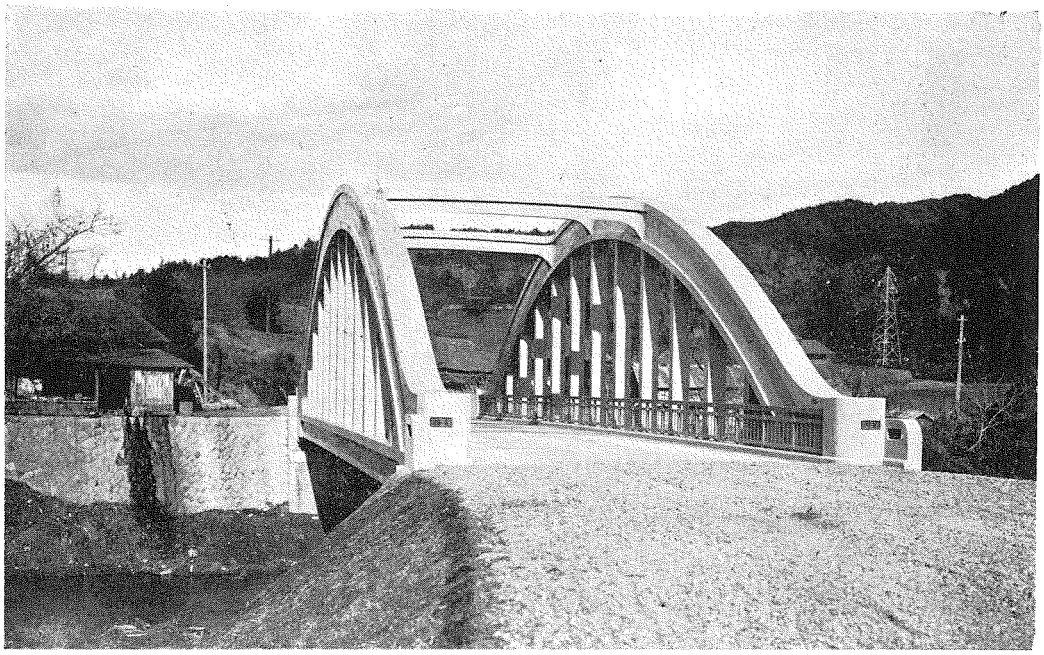


（1）新裝の央橋

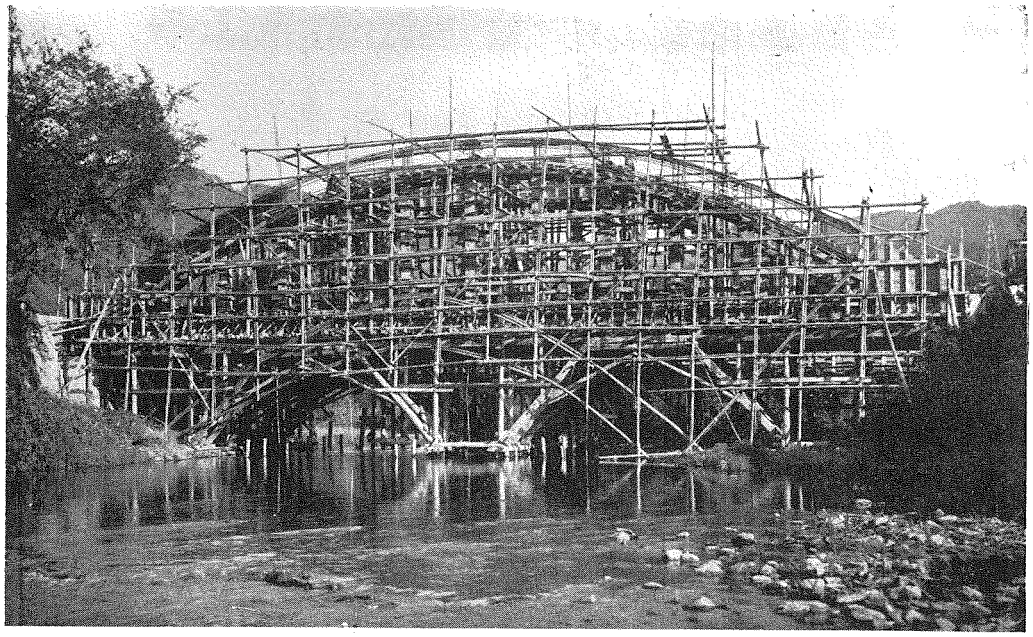
新裝の央橋を見る

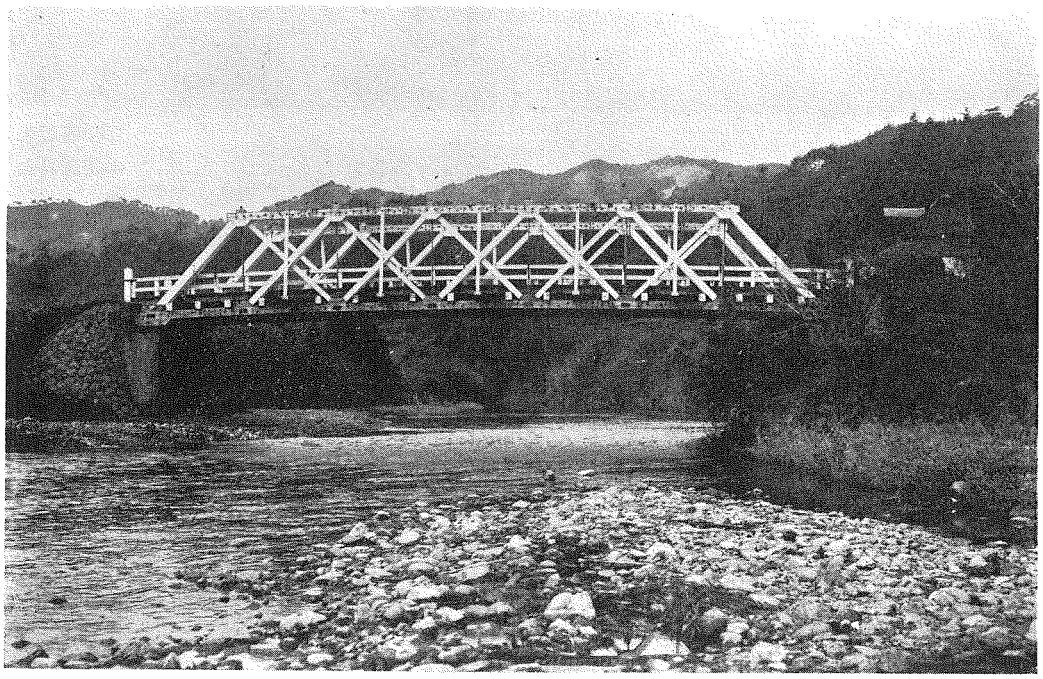
茨城縣土木課長
杉山宗次郎

水戸を語るものは先づ黄門を語らねばならぬ。その黄門が晩年西山に隱棲して想を大日本誌に瀝いた由緒の地、太田を去る僅か6粁の久慈郡河内村、佐都村の村界に、此度茨城縣最初のコンクリート・タイド・アーチが懸つた。此邊は所謂里川の溪谷であつて、山は高く水は清く、一日の清遊に好適の地である。

府縣道水戸會津線(指定第1號)は丁度S字型に曲つたこの里川を3度渡つてゐる。上流にある橋梁は町屋橋で下流のは春友橋と云ひ、この度架つたのは中央にあるところから央橋と呼ばれてゐる。

古い央橋は明治37年に本縣最初のハウトラスとして彗星の如く現はれ、當時その新らしい結構の美を謳はれたものでああつたが、時の流は如何とも致し方なく、本縣最後のハウトラスとして僅かにその餘命を保つてゐた。然るに昭和10年の大洪水に因り一朝にして墜落流失したので、縣は直ちに國庫の補助を仰ぎ工費23,000圓を投じ、橋長34.0米有效幅員6.0米のこの新らしい橋梁を計畫し、今その美くしい完成を見た次第である。



（2） 工事中の央橋

（3） 日露戰爭當時の央橋